http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ch/index.html　令和5年7月14日発行

中北.com チュウホク ドット コム

地域教育情報紙

中北教育事務所
教育支援スタッフ
〒407－0024
韮崎市本町4－2－4
TEL 0551-23-3046
FAX 0551-23-3013

2

中北の地域社会（com munity）の心の交流（com munication）をめざします

本に願いを

韮崎北西小学校

子供の読書活動優秀実践校として、韮崎市立韮崎北西小学校（横内理香校長）が、文部科学大臣表彰を受けました。その活動をご紹介します。

【富士山が正面に見える、明るくよく整理された図書室】

中休みの時間、図書室に向かうと、バッグを持った、たくさんの児童とすれ違います。校長先生が「何借りたのかな」とたずねると、嬉しそうにスタンプカードと一緒に本を見せてくれました。ちなみにスタンプはたまると様々な「ちょっと嬉しい」特典になるのです。図書室も沢山の児童が。読書週間中ということで、司書の先生ばかりでなく、図書委員の先生も輪の中にいます。韮崎北西小学校では長年読書の習慣づくりに取り組み、朝読書や、中・昼休み時の利用、図書室でのイベントなど、児童が本に親しむ機会が多くあります。本の紹介をするポップコンテストはあらすじやおすすめポイントだけでなく、イラストなども可能で、読書を通じて、読解力だけでなくイマジネーションといった、様々な力を育むことも狙っています。本や図書室が非常に近いところにある印象を受けました。

【取り組んできたこと】

――賞を受けるに当たって、どのような点が評価されたのでしょうか。

小規模校ということを利点とし、きめ細やかに、児童が本に触れるような様々な工夫を長年続けてこられたことに大きな意義を感じます。多くの児童が毎日のように図書室を訪れ、本を借りていくことが普通となっています。コロナ前に取り組んでいた地域ボランティアの読み聞かせも再開させる予定です。保護者や地域と一体となり読書環境を支え、それを継続していることが評価されたのでしょう。（横内校長）

――どのような活動の特徴がありますか

読書週間は、多くの学校で春秋2回ですが、本校では４回あり、今回は朝読の時間に上級生の読み聞かせも行います。加えて担任の先生方が、普段から図書室を使い指導をしてくれています。また、「家読」（うちどく）活動にも力を入れています。感想文にイラスト、保護者のコメントという構成で、毎年全学年全児童が取り組みます。家族みんなでの読書が目的ですが、保護者の理解と協力がないと難しいです。小規模校ということもあるかもしれませんが、協力いただきありがたいです。（司書　奥石幸子先生）

――児童の様子はどうでしょうか

５・6年生は児童会など様々な活動があるので毎日は難しいですが、それまでは、多くの児童たちが、毎日どこかの時間で一回は図書室に訪れます。また、図書室に来ることが多いこともあり、担任の先生方の指導もあるので、低学年の児童でも分類表や簡単なキャプションだけで、自分で借りた図書を正しい場所に返却できるようになります。分類表は図書館と同じなので生涯活用できます。（奥石先生）

――最後に

この学校で培われた習慣が生涯続くことを願っています。調べものもデジタルが中心となっていますが、量が膨大な上、フェイクもあります。本からまとまった確かな知識が得られるので、図書館をうまく活用することをお勧めします。何より、いつも子どもたちが「図書室がほっとできる場所」としての居場所づくりを今後も努力して続けていきたいです。（奥石先生）

韮崎北西小の児童はますます本が好きになっていくことでしょう。生涯続く知の旅へ誘われたのですね。教育の大きな可能性を感じました。あなたは本にどのような願いを込めますか？

愛宕山こどもの国 リニューアル！

綺麗になった！が素直な第一印象。平日の午前中だが、自由広場は乳児を連れた家族もちらほらと。美しい緑の芝にダイナミックや遊具、授乳室や多目的トイレ、休憩室にもなる工作室と、楽しく・皆に優しい施設に生まれ変わっています。自由広場のリニューアルを待ちわびた人が多かったためか、GWには９日間で４万５千人もの来園者を数え、園や小学校を中心に、ほぼ毎日利用団体がある状況が続いているそうです。

「おかげさまで、『綺麗になったね』というお褒めの言葉をよくいただきます。中には『有料にした方がいいよ』などとおっしゃる方もいます。遊具は対象年齢や安全性に配慮しています。」（広報担当戸田さん） なるほど、納得です。 「これからの時期は、熱中症や、熱くなった遊具による火傷に気をつけて遊んでほしいです。また、子どもの利用する施設なので、マナーを守って御利用いただけると嬉しいです。」（戸田さん） 無料解放の「こどもの国」なので、禁タバコ、ゴミの持ち帰りなど、最低限の配慮が必要ですね。

さて、リニューアルした目的なども気になるところです。

愛宕山こどもの国は、開園50周年を機に、「自然保育の拠点」として再整備されることとなり、リニューアルされました。 山梨県では豊かな自然や地域資源を活用した保育・幼児教育（自然保育）を推進しており、 愛宕山こどもの国を拠点として活用し、自然保育の導入を促進する狙いがあります。そのため、以前から遠足などの学校行事をはじめとして、多くの方に利用されてきましたが、今後は、整備された工作室やキャンプ場などの施設を活かし、普段では体験できないような多くのプログラムを新たに展開していくそうです。

イベントは参加申し込みが多いので、抽選になってしまうこともあるようですが、この機会に是非、親子で自然に触れ合ってみてはいかがでしょうか。

※問い合わせ先 ℡ ０５５－２５３－５９３３

＃中北バトン

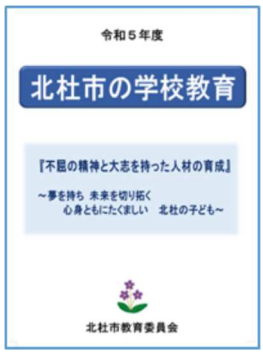
様々な立場から、子どもたちへの思い、地域への思いを語っていただきます。

「北杜學」のすすめ

令和5年度中北地区地域教育推進連絡協議会会長
北杜市教育委員会 教育長 輿水 清司

「北杜市では、「北杜市の学校教育」において、私たちの身近な「原っぱ」を「学びの原点」と位置づけ、「原っぱ教育」を学校教育の基盤として推進してきております。

豊かで美しく、きびしい自然環境、そこに生きる人々、そこには開拓や災害などの歴史、育んできた文化、様々な文化財など多くの地域資源がこの北杜の地にはあります。そして、それらは町村合併により、さらに広く、豊かなものとなりました。その地域資源を、いわゆる「ひと・もの・こと」として、聞いて、見て、触れるなど五感で感じる「体験的な学び」を通して、社会を生き抜く力の基礎的な能力を養います。また、そこから生まれる疑問や興味のあることを調べ、課題を追究するなどの「探究的な学び」を通して、課題解決能力など、今後必要とされる能力を身に付けていきます。



原っぱ教育を推進していくにあたり、学区としての地域のみならず、北杜市全体を学びのフィールド（原っぱ）として、その地域資源「ひと・もの・こと」を集めた「ほくと學」を北杜市の全教職員の協力のもと、令和４年度に作成しました。今後、その内容については加除修正していきたいと考えておりますが、他郡市からの教職員も含め市内の教職員がその内容を共有し、また、教材の基礎資料として活用し、児童生徒の主体的な学び、豊かな感性、思いやる心、郷土を愛する心などを育んでいきたいと考えております。

「いつの間にか私は・・・」

中北地区地域教育推進連絡協議会

６月２２日（木）敷島総合文化会館において、第1回中北地区地域教育推進連絡協議会（会長 輿水清司 北杜市教育委員会教育長）の研修会が行われました。その内容の一部を紹介します。

○「学校教育に期待すること」

山梨予備校 校長　元山梨県教育委員会 教育長　　斉木　邦彦　氏

この、難しい問に対し、斉木邦彦先生（以下先生）は、独特の穏やかな語り口と、数々の遅効性のユーモアを交え、正面に向き合い膨大な熱量でお答えくださいました。90分ではとても収まりきらないような濃く深い内容を、きっちりと納め、哲学的に聴く者の感性をゆさぶり、あえて考える余地を残します。

まず、ご自身の生き様をユーモアたっぷりに伝え、「いつの間にか」形成された先生の個性を語ります。続けて、今の教育についてその難しさや不易な部分を時に逆説的に説いていきます。例えば「誰もが自分の個性で生きている／枠に抵抗し個性がまっすぐ育つ」だからこそ、「学校の枠が重要なのだ」と。さらに「学ぶ」とは、歴史を受け継ぐこととし、学ぶことの根本を明らかにしようとし、「教える」とは、勇気と信頼を背中で示すことで、教える人間の姿勢や教師の魅力について迫ります。

後半は、学校教育に期待することから始まり、教育基本法第１条の教育の目的すなわち「人格の形成」について触れ、人格の完成に向けた不断の努力の過程が教育の目的であるとします。「唐揚げを堂々と選ぶ」例えから、大人の覚悟と責任を、自分らしく堂々と生徒に示せばよいと背中を押してくれます。最後に、（全体を通じても）「ささやかなこの人生」「いつの間にか私は」「人生はニャンとかなる」などのワードから、「学校教育に期待すること」のある部分は「先生たちに期待する」ことで、過重な期待や責任を感じている先生方（や、これから教師を目指す者）に、理屈を超えた部分で、教師の仕事の素晴らしさや、自分らしく頑張ればよいことについて、熱くエールを送り続けていただいたように感じました。「いつの間にか私は」の人生、教育とは何か、また、声を大にして頑張れと言われない分、かえって大切なものが心に染み入るような研修会でした。

◇参加者の感想（一部を省略しているものもあります）

「たくさんの考えるべき種をいただきました。答えを出すことよりも、考え続けることが大切ですね」

「「子どもたちと過ごす生活を、大人も何の計らいもなく楽しんでいること」、大変に感心しました。」

「ご自分の生き様を教育という視点で語られる姿に感銘を受けました。私も自分の生き様を隠すことなく、子どもたちや同僚たちと向き合っていきたいと思います。こう思える勇気をいただきました。」

「「大切にしてもらった記憶」が残る、とても印象的な言葉でした。改めて教職は、子どもたちの未来を開いていく力を与える、素晴らしい職だと思いました。明日からまた、子どもたちが力強く生きていけるような勇気を与えられるようにしていきたいと思わせてくれました。」

「お蚕さん愛」が人を結ぶ

和泉愛児園（幼保連携型認定こども園）

「かわいぃ～」うさぎぐるーぷ（年小・年中）から声があふれます。和泉愛児園（梶原智子園長）で保坂訓加先生（主幹保育教諭）が園児たちに質問します。「おかいこさんの食べ物は」「やさい～」「桑の葉しか食べないんだよ」「なんで～」園児たちのテーブルには園児の数に合わせた、なんと本物の蚕が。 桑の葉が配られ、園児が思い思い与えます。「たべてる～」興味津々です。「触って大丈夫だよ」園児たちは喜んで手にします。お蚕マンションが出現し、「まゆだ～」中には糸を吐く蚕に触ろうとする者も。さらに、煮た繭から、手で回す機械を園児たちが回して糸にしていきます。「きれい～」「沢山の糸になったら何かつくりたいね」

お蚕マンション

和泉愛児園では数年前から蚕を飼い、今日の蚕は昨年産卵した卵から羽化したものなのだそうです。「子どもたちに質問され一緒に調べたりして共に学び、ますます好きになっていきます。共に成長している感があります」（保坂先生）「蚕はアレルギーがないのでいやでなければ誰でも触れることができます。ダメばかりでなく、多少乱暴に扱って傷つけてたとしも、そこからの学びもあると信じています。蚕に同じ目線で接するため、コミュニケーションが苦手な子どもも、蚕を通じて自然に他者と接することができるようになります。好きなことや集中することで子どもたちは無限に力を発揮します」（梶原園長）

大人の熱量が子どもを巻き込んでいく。人のつながりを生み、共に次の高みを目指す。教育の原点がありました。この活動は、１月２５日（木）の中北地区地域教育推進連絡協議会で実践発表していただく予定です。

学校 ＋ 地域 ＝ よりよい社会の形成

白根高校

６月28日（水）に白根高校（伊藤裕之校長）で、１年生（約１３０名）を対象に総合的な探究の時間を利用し、「南アルプス市の課題を整理する」と題してワークショップが行われました。白根高校の取組は、山梨の高校において非常に先駆的であり、今後の高校のあり方について大きな方向性の一つとなり得ます。興味深い学校の取組とワークショップの様子を紹介します。

地域に開かれた学校づくり

AIの急速な発達など、未来や社会のあり方が不透明になり、学校教育も大きな変革が求められています。課題解決の一つのベクトルとして「地域に開かれた学校（教育課程）」が強く求められています。文科省は「より良い学校教育を通じてより良い社会を創るという目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められている資質・能力を子供たちに育む」ことが重要だとしています。

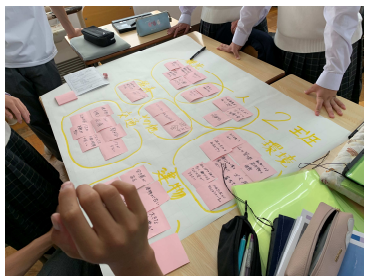
白根高校では、令和２年度に学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を発足させており、県下の高校では導入事例が少なく、地域協力や連携に対する意識の高さが分かります。地域との協働・連携という視点では甲府第一高校も素晴らしい取組を展開していますが、白根高校では「この４月から南アルプス市との包括連携協定を締結し、地域の探究活動や観光資源の発掘、見直し、ユネスコパークにかかわるSDGｓにかかわるさまざまな活動などをおこなっていくことになりました。」（伊藤校長）と、より地域と密着した内容なっています。今回は、年間を通じて行われるプログラムの一環としてのワークショップで、今求められている学びの姿の理念をそのまま体現したような取組なのです。

講演会

この講演会は、「地域資源を生かした観光づくり」と題して山梨大学の菊地淑人准教授の指導の下行われています。ワークショップに先立ち（別日程実施）、菊地先生の講演会がありました。観光とは何かを中心として、県内や国内の観光地のそれぞれの特色や工夫の説明いただき、観光の種類、これからの時代に持続可能な観光について、そして地域にはそれぞれの歴史やストーリーがあることなど、大きな視点で観光とは何か、どのように捉えていくことが大切かなどの理解が深まりました。

ワークショップ

ワークショップは各教室で行われました。SDGｓに資する持続可能な観光を考えるというゴール向かって、今回はブレインストーミングを用いたグループでの作業です。南アルプス市の課題の解決を考え整理すること、すなわち現状把握から観光提案に結びつけていく狙いです。班ごとに模造紙を配り、問題点を付箋でペタペタ貼っていきます。「とにかく沢山意見を出すこと」「出された意見を否定しないこと」と大学生が指導。当然市外の生徒もいます。「住んでないからわからない～」大学生が「大学の用意した資料を見てもいいよ」とさりげなくフォロー。中にはネットで検索を始める者も。徐々に「自然が失われている」「高齢化」など、付箋が貼られていきます。最後はアイデアをグループ化させます。終わるのかな？と思って見ていると、どの班もクループ化できています。高校生の柔軟さは素晴らしい。次回の説明があり終了です。今後、すごい案が出れば市にも貢献できますね。



◇生徒の感想

「市のことなど何も考えたこともなかったし、知らなかった。今日考えるきっかけとなった。問題解決には人と時間が必要だと思った。」

「市に住んでいるが、真剣に考えたことはあまりなく、こんなに課題があることに驚いた。解決してよい市にしたいと思った。」

今回の取組で興味深かった点は、菊地先生の元で学ぶ大学生がファシリテーターとして参加したこと。大学生も協働により学びを深め、人材の育成にもつながります。市役所の職員の方も見学に来られていて、今後も温かく大切に育てられてく取組となることでしょう。

●コミュニティ・スクール：学校と保護者や地域の人々がともに知恵を出し合い、学校運営に意見を反映させることで、一緒に協働しながら子供たちの豊かな成長を支える「地域とともにある学校づくり」という仕組みのこと
●ワークショップ：参加者の主体性を重視した体験型の講座、グループ学習、研究集会などを指す言葉として使用
●ブレインストーミング：アイデアを生み出す「集団発想法」手法であり、複数人で会議の際にアイデアを出し合い、アイデアや発想の整理する事　●ファシリテーター：司会進行役